

# 拓く

・・・ Hiraku News ・・・

2016  
春  
vol. 05

福岡県久留米市安武町武島468-2  
社会福祉法人 拓く  
<http://www.h-polepole.com>  
TEL:0942-27-2039/FAX:0942-27-2086

2016年6月1日発行

地域に居場所を拓く

誰もがどんな状態になってもこの町で暮らす



## “安武そら豆そうめん” 夏のギフトにどうぞ！

島原市のそうめん製麺所さんと共同開発。

安武そら豆をブレンドした  
のど越しの良い味をお楽しみください。

(問) ☎ 0942-27-2039まで



## 4月、新たなコミュニティ、「安武ほんによかね会」が始動！ 日頃の「つながり」が、みんなを救う。

14年後、あなたは何歳になりますか？2030年は65歳以上が約31%、うち75歳以上が約20%、子どもが約10%となり、生産年齢が約58%になってしまいます。日本はまさに“大介護時代”を迎えますが、介護する支援者は少なくなるのです。国の財源が悪化する中で、社会福祉法人の私たちは税金事業だけに頼るわけにはいきません。15年先を見据え、お互いに支え合いながら誰もが元気で暮らし続けるために、自助・互助の体制を創っていく必要があると考え、大きく舵を切ります。

遡れば2008年、国の研究事業を受託する中で、公助サービスだけでは障がい者や高齢者を支えられない時代がくると想定し、いち早く「コミュニティづくり」に着手しました。例えば、日頃から近所の皆さんと繋がりを築いてこられた場所にグループ



ホーム「三原さん家」や「下宿屋南の家ほっと」、「御井あんだんて」を作り、ここを拠点として、地域の皆さんが集える「地域食堂」「御井・つむぎの会」「笑顔の会」を起こし、次に住民による移動サービス『でてこんの』が誕生。その長年の積み重ねで、昨年12月に「安武こども食堂」が立ち上がりました。そして今年の4月、「安武そら豆祭り」の開催を契機に、安武町の20代から40代の若者たちが集まった「安武ほんによかね会」の結成。新しいコミュニティが動きだしました。これまで、地域で培ってきたつながりに、さらに広がりが増え、地震の時など危機的場面に陥ったとしても、みんなを救い、助け合える関係になっていくと期待しています。

（常務理事 馬場 篤子）



# 平成28年度 年間計画

予算評議員会・理事会で承認された平成28年度事業計画の主なものは次の通りです。

## 1.福祉サービス体制の整備・充実

### (1)社会福祉法人制度の改革への対応

社会福祉法の一部改正に伴い、事業運営の透明性向上に取り組むとともに、議決機関となる評議員会設置や社会福祉充実計画策定など平成29年度に向け準備を進めます。

### (2)法人活動の見える化

ホームページの随時更新、シャイニング（月1回）、拓く通信（年4回）発行などに取組みます。

### (3)コミュニティづくりの推進

地域食堂、でてこんの、ポレポレ祭り、安武そら豆復興作戦、安武ほんによかね会、こども食堂、遊び場づくり、健康教室の開催など地域住民と一体となって取組みます。

### (4)GH「ニユンバ」の増築

利用定員の増員と、医療的ケアが可能となるよう増築を行います。

## 2.生きがいとやりがいのある地域生活

### (1)地域生活を送る自主的活動の促進

自主的活動の促進を基調とし、地域住民と一体となった夏祭りなど各種行事の開催、環境美化ボランティア活動の取組み、相互の助け合い・思いやりの醸成を図る小集団(6~10人程度)旅行を実施します。また、余暇活動に必要な外出経費や通所者の送迎経費の一部を継続して助成します。

### (2)工賃アップのための生産・販売活動

外観・味覚・デザインに優れた弁当・

惣菜・菓子・パンの独自ブランド商品の開発や営業業務・接客マナー研修を実施します。また、「安武そら豆」の生産場所の表示板設置、加工品の開発、直販などにより有利販売に取組みます。

## 3.当たり前の生活ができる体制づくり

### (1)新しい暮らしへのステップアップ

サテライト・一人暮らしなどへの自立支援の推進、新たな暮らしの場のあり方の検討などに取組みます。

### (2)制度改定を想定したGHの運営改善

薄まる制度を前提に、入居者の再配置や支援内容や時間を見直すなどGHの再構築に取組みます。

### (3)重度障害者への対応

強度行動障害・喀痰吸引等の専門研修の受講を勧め、実践に取組みます。

### (4)外出支援（余暇支援）の拡充

入居者の外出機会の拡充を図るとともに、それに伴う生活費を把握し今後の取組みに反映します。

## 4.障害児・家族が共に向上する取組支援

GHでの自立体験の推進、家族が集い、相談し合える「ひめの会」「土曜の保護者会（新規）」等に取組みます。

## 5.相談支援の体制整備

保護者の高齢化や複雑な家庭背景に対応できる連携強化に努めます。西部地区の基幹相談支援事業として、総合的・専門的相談支援と各相談事業者とを対象とした指導・助言、社会資源の検討開発を行います。

（法人事務 林 暉宏）



## 計 画 相 談

### 地縁・血縁の「助け合い」を見直しましょう！

平成25年6月から計画相談を開始して、間もなく3年です。相談を受ける中で感じているのは、複雑なケースがとても多いということ。例えば、子どもが学校に行けないとの相談を受け自宅訪問をしたところ、室内はゴミ屋敷で、お母さんに発達障害があるために片づけができず、子育ても上手くいかず、子どもをひどく叱責していたケース。アルコール依存症とうつ病のご夫婦で、食事もとれずに痩せ細り、命が危ないケース等々。このような複雑なケースは、実はごくごく普通の何処にでもある家庭で起きているような気がします。

このようなケースに対応するには事業所の取り組みだけでは不十分です。学校や病院、児童相談所、アルコール依存症家族の会、成年後見制度など福祉サービス以外の機関を巻き込む事が必要です。その際にキーパーソンとなるのが家族や親族、地域の協力者。相談支援は後方支援にまわり、必要な時に再度介入しています。

現在、子どもの貧困や格差社会の問題がニュースに取り上げられています。今後は高齢化・少子化・財源不足が深刻化し、これまでのような障害福祉サービスの受給量は見込めない時代が想定されます。ここで立ち止まって、地縁、血縁の関係性を是非見直してほしいと思います。 (相談支援センターカリブ 大力陽子)



## 7月 喀痰吸引等研修(第3号)受講者募集

当法人は、「喀痰吸引等研修(第3号)」を実施しています。これまで3回実施し、初めて目にする医療用語や器具に戸惑いながらも、約50名の介護職の皆さんが試験に合格し巣立っています。多くの方々に挑戦していただきたいと思います。受講希望の方は、募集要項及び注意事項をHPにてご確認の上、お申込みください。

日 時：7月 9日(土) 9:00~17:00  
(2日間) 7月10日(日) 9:00~16:00

会 場：出会いの場ポレポレ

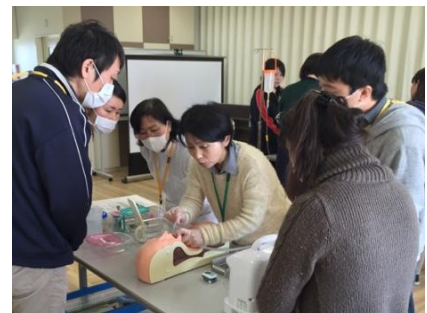
対 象 者：特定の重度障害者等に喀痰吸引等を実施しようとする介護職員等

定 員：15名

受 講 料：基礎研修(講義と演習) 14,000円  
実地研修(特定の対象者1名につき) 3,000円

申込締切：平成28年7月1日(金) ※基本研修のみ受講不可。  
再試験手数料1,000円

★募集要項及び注意事項 詳細は⇒「拓くHP」へ (担当 田町 菜穂子)





# 女子だけで鹿児島に行ってきました！ ～利用者旅行～

4月14日（木）・15日（金）の2日間、出会いの場ポレポレ利用者の女子のみで鹿児島へ旅行しました。今年は、3班に分かれて実施する予定です。

当日の天候は晴れ。九州新幹線で約1時間。あっという間に鹿児島へ到着し、まずはビル6階の上にある直径60mの観覧車。一番高い所だと91mです。雄大な桜島が見え、下を向くと足がすくんでしまいます。「じっとしてないと怖いね～」「私、高所恐怖症なんだけど乗れた」等、眺めを楽しまれていました。



鹿児島水族館では、たくさんの魚達に迎えられ出発時間ぎりぎりまで楽しみ、宿泊先の桜島へ。すぐバスで足湯へ行きました。火山灰でできた真っ黒な海岸にてスコップを使って穴を掘ったら、43度の熱いお湯が出てきて、皆さんはびっくり。少し熱いけど美しい景色を見ながら足湯を楽しみ、貴重な体験をしました。

夕食は地元の食材をお腹いっぱい召し上がり、塩分が多く含まれた温泉で疲れをいやしてそれぞれの部屋でくつろいでおられました。すると、「緊急地震速報」のアラームが。ホテルが少し揺れましたので、TVにて状況確認を行い、利用者さんのご家族に公衆電話からすぐに連絡をしました。問題は帰りの交通機関。九州新幹線が脱線の為運休となり、空路、陸路など様々な方法を模索。ポレポレと密に連絡を取り合いながら、高速道路を使用した宮崎経由での帰路に決定しました。皆さんに2日目の観光を中止にして帰宅する事を伝え、「九州1周旅行をしましょう」と明るく話しながら、不安にならないよう努めました。



翌朝、ポレポレが手配したマイクロバスに乗り、コンビニで食料や水を大量に調達し、延岡へ。車内では体調管理を最優先に、体操や体位変換、リラックスできるような声かけを心がけました。延岡に着いて久留米からの送迎車へ乗り換えました。途中、トイレや食事休憩を挟んで約9時間の移動でしたが、無事に久留米へ到着し、ご家族のもとへお送りする事ができて本当よかったと思います。

今回の鹿児島旅行では、緊急事態をどう乗り切るか、連絡方法、対策など旅行前の入念な準備についての課題が見つかりました。この経験を活かし、利用者の皆さんにさらに喜んでいただけるような旅行を実施していきたいと思います。

（担当 石橋 千鶴）

# 「安武こども食堂」、応援しています！ 地域の皆さんと、助け合いの輪、広げたい

2014年に「子どもの貧困対策法」が施行されています。法律で定めなければいけないほど日本の子どもの貧困率は上がっているということです。近年、ひとり親、生活保護、DV、精神疾患、ステップファミリー（離婚・再婚などで血縁関係のない



親子・兄弟姉妹）など複雑な家庭が増加しています。貧困から生じる虐待や不登校、孤立化など、貧困の連鎖が私たちの周りの見えにくい処から確実に始まっています。

出会いの場ポレポレのある安武町は農村地帯が広がり、人口約6000人、児童数328人、高齢化率29.4%の小さな校区です。この町で「安武こども食堂」をスムーズに始めることができたのは、6年前から高齢者のための「地域食堂」が開かれ、その運営に携わる人材などの基盤があり、校区に高齢者や子どもに対する福祉の意識があったことが理由だと思えます。

平成27年12月から始まり、早8回となりました。400人近い子ども達に食事を提供したことになった今、その目的としては、まず地域の未来を担う子どもたちの健やかな成長を地域で支える、そして、「食（生きる力）」に対する興味を育み、その大切さに気付いてもらうことだと明確になってきました。

今後の課題は、安武コミュニティーセンターで行われている男性料理教室の生徒さんや団塊の世代、PTAや保育園の保護者などに参加していただきながら、新たなコミュニティとつながり、支え合う仕組みを作ることです。子ども達も食べるだけではなく、自分達でも作れるように料理教室を実施し、おにぎりを作ったり、インスタントラーメンをそのまま食べるのではなく野菜を入れて栄養のバランスを少しでも考えるようになったり、防災食を食べて日頃からの備えを考えたり。さらに、お楽しみとして夏祭りやBBQをするなど様々な企画を考えています。



先日は、継続的な運営と広報のために、子ども達にペットボトル募金の募金箱を作ってもらいました。募金箱を家に持ち帰り、保護者や祖父母、周囲の人に募金を呼びかけて、持参する子どももいました。「安武こども食堂」は徐々に地域に浸透しつつあります。この取り組みが貧困の連鎖を止める手助けになればと思います。

（担当 前田 力哉）



# 安武そら豆復興作戦 実行中！

## 「第1回安武そら豆祭り&子ども祭り」を開催しました

安武そら豆栽培を始めて、今年で5年目の収穫を迎えました。その昔、安武町では当たり前栽培されていた名産の「安武豆」ですが、今はJAに出荷する生産者がわずか3軒。私たちは、町おこしの一環としてそら豆を再び産地化しようと、「安武そら豆復興作戦」を実行しています。そのひとつが、4月22日（金）・24日（日）に初めて開催した「安武そら豆祭り&子ども祭り」。同時に立ち上げたのが、安武町の若い世代による「安武ほんによかね会」です。



私たちが目指すのは、「誰もが地域で当たり前暮らす」こと。そのためには誰もが支え合える町、そして子どもや障がい者、お年寄り誰もが「安武はほんによかね〜」と言えるような魅力のある町であってほしいと思います。安武町は、高齢化率29.4%。しかし、小学生の数は増えているとのこと。その魅力は何なのか。どうすれば魅力を引き出せるのか。私たちはそう問い続けながら、安武町の皆さんと楽しみながら町おこしをしていきたいと考えています



24日の「安武そら豆祭り」当日は、地元の皆さんによる「そら豆料理コンテスト」や安武で採れた新鮮野菜、そら豆を使った料理の販売を行いました。プロの方にご協力をいただいたそら豆ピザやシチューも大好評。子ども達のために「紙飛行機飛ばし大会」も催し、会場にはたくさんの笑顔があふれていました。

22日の「安武そら豆子ども祭り」には園児82名が参加。当法人のそら豆畑にて、長年そら豆作りに携わってきた地元の方のお話を聞いたり、そら豆のサヤを使っての人形づくりをしたり、そら豆絵画コンテストも行いました。最後に、安武町のボランティアの方々によって作っていただいた「そら豆ごはん、そら豆シチュー、そら豆蒸しパン」をみんなで食べました。その一つひとつに子ども達の新鮮な驚きと笑顔。青空の下で、そら豆を知り、食べて、たっぷり遊んだ、楽しいひとときとなりました。



安武そら豆復興作戦の物語は始まったばかり。今から地域の方々と一緒に創っていききたいと思います。  
(本部長 北岡 さとみ)

# 今年度、新たな一歩を踏み出します。 ポレポレ倶楽部 会員募集！

ポレポレ倶楽部は設立から15年が経とうとしています。その間、「社会福祉法人拓く」を人的・物的に支援することを目的として、また、地域に根ざし、障がいがあるなしにかかわらず、共に安心して暮らしていただけることを願って様々な活動をしてきました。そして今、法人を取り巻く環境も変化してきており、新たな一歩を踏み出す時にきています。

現在、会員は地域やボランティアの皆さん、保護者、拓くスタッフなどですが、中心メンバーの保護者は70代です。若い方々の入会を増やし、老いも若きも混ざり合って次のステップに進みたいと思います。

また、15年の間に法人の組織も拡大。当初は「出会いの場ポレポレ」だけでしたが、今では御井地区の「御井あんだんて」「夢工房」、南地区には「下宿屋南の家



ほっと」などのグループホームが生まれています。それぞれの地域では保護者の皆さんと地域の方々が協働で盛んに活動されていますので、当倶楽部も加わって、新しい取り組みを考えていきたいと思っています。

さらに、専門部として研修、バザー、ネットワークの3部門を設けていましたが、現在は一部の会員が実働するのみ。そこで、設立当初の目的を実現するために、今一度原点に戻り、各専門部、各会員が活発に活躍できるようにしたいと考え、以下のように改革を行いました。皆さんのご加入をお待ちいたします。

**ポレポレ倶楽部会員募集中！ イベントへの参加もお待ちしております。**

## ①年会費 1,000円

若い皆さんも、誰もが入会しやすいように3000円から変更しました。賛助会員制度を廃止。全会員1000円とします。

## ②定例会 月1回開催・開会時間 16時30分

これまで夜（19時30分）の開催でしたが繰り上げての開会とします。

## ③今年度の活動計画

- ・たこ焼きバザー（環境フェア、下水道フェア、ポレポレ祭り他）
- ・研修（愛媛県愛南町視察、日帰り訪問研修）
- ・ネットワーク（バーベキュー、夏祭り、餅つき）

（担当 中野 みどり）



## 「熊本地震」 熊本県西原村の支援をしています。 日頃の「つながり」が窮地を救ってくれました

4月14日（木）21時26分からの「熊本地震」。5月に入っても何度も余震が続いています。地震直後、当法人のグループホームの利用者さんは大丈夫だろうかと思いましたが、携帯電話がつながりません。しかし、近くに住むスタッフや地域の方々が利用者さんを心配して駆け付けてくれました。また、その日は利用者さん5名とスタッフ4名で鹿児島桜島旅行へ。新幹線、高速道路が使えず窮地に陥ったのですが、助けていただいたのは「そら豆」でつながった鹿児島の人。地元のバス会社に頼んでいただき、鹿児島から宮崎延岡へ。そこに迎えに行ってくださったのが、移動サービス「でてこんの」でつながった久留米のタクシー会社さん。車と運転手2名を派遣していただき、無事、久留米に戻ることができました。日頃つながっていたから、いざという時に窮地を脱することができたのだと実感しています。



今回の地震では、全国の福祉関係者から、「大丈夫ですか？」とお電話やメールをいただきました。特に、東北大震災の支援で現地入りした時から交流を重ねている宮城県石巻市や福島県南相馬市、浪江町、岩手県の皆さんから、「できることがあったら、何でもしますから」と心強いお言葉。そして、4月23日、宮城県石巻市雄勝町にてまだ厳しい仮設暮らしをしておられる方々から「拓くさんを通して熊本地震の支援に使って欲しい」と義援金10万円が送られてきました。

また、4月24日に開催した「安武そら豆祭り」にて募金の呼びかけをしたところ「44,635円」が集まりました。熊本地震の支援に使わせていただきます。

### 熊本地震の支援 阿蘇郡西原村の皆さんへ 「必要な物を必要なタイミング」でお届けしています。

熊本地震から3日後の4月17日、当法人は利用者の保護者の皆さんと共に、熊本県益城町の隣町、阿蘇郡西原村にオムツや下着等を運びました。18日・21日には炊き出しの食料、布団、シーツ等、5月に入り、ボランティアの派遣、軽トラック等をお届けしました。「必要な物を必要なタイミングで支援する」。これが東北支援で学んだ教訓です。今後も、（一社）筑後中小企業経営者協会等の久留米市民の皆さんに呼びかけながら西原村に必要な支援を続けていきたいと思っております。



5月10日、村内の支援活動に軽トラを使用したいという申し出があり、届けました。

（常務理事 馬場 篤子）